

氏 名 光平 有希

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1812 号

学位授与の日付 平成28年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 江戸期・明治期日本音楽療法思想  
— 養生論及び西洋医学理論の受容史を中心に —

論文審査委員 主 査 教授 伊東 貴之  
准教授 CRYNS FREDERIK  
教授 細川 周平  
教授 鈴木 晃仁 慶應義塾大学  
教授 塚原 康子 東京藝術大学

論文内容の要旨  
Summary of thesis contents

本論文では、日本音楽療法史上の転換期と考えられる江戸期から明治期にかけての音楽療法思想の特徴を実証的に捉えるということを課題として設定し、その形成過程及び独自性を、江戸期養生論と明治期西洋医学理論の受容との関係の中で解明することを目的とする。これまでの日本音楽療法史の先行研究は、いずれも音楽療法関連著作あるいは事例の紹介に留まり、音楽学的な観点からのみの考察が強調されてきたという問題点が見受けられる。それを解決するため、本論文では、治療例の網羅的収集及び検討のみならず、そこに見られる思想に着目し、医学史・音楽史・比較文化史の様々な側面から研究する学際的手法を用いるほか、国際的な視野に立ち、日本側史料と中国や西洋などの海外側史料との比較研究を通じて考察を試みた。

本論文での研究方法は、西洋医学思想受容史の先行研究の手法に倣って、江戸期・明治期に刊行された音楽療法関連史料を網羅的に調査した上で、各書籍及び記事における音楽療法記述の思想源流を探り、その典拠内容との比較分析を行うことで、江戸期・明治期音楽療法思想の特徴を解明するといった、史料調査、典拠同定、比較分析の順で考察を深めた。具体的には、まず江戸期に刊行された養生書の網羅的調査の上、各史料に書かれた内容の典拠を同定し、思想的基盤である古代中国養生論との比較分析を行った。その後、江戸期養生論における音楽理論の位置づけや変遷過程の分析を行うことにより、音楽を予防医学として用いるという思想の受容過程を明らかにした。次いで明治期に関しては、養生書及び衛生書のほか、それ以外の書籍並びに雑誌・新聞記事を対象とし、広い範囲で調査を行った。そして、これらの史料に含まれる音楽療法関連記述の典拠を同定し、それらの記述内容と、その典拠内容とを比較分析することによって、西洋音楽療法の受容過程及び西洋と日本における音楽療法の相違点を明らかにし、その上で江戸期・明治期における日本音楽療法思想の形成過程及び独自性について総合的に論じた。

本論文は序論と結論のほか、3つの章から成る。本論文で取り扱う江戸期及び明治期音楽療法については、その形成過程を考察する上で分岐点と考えられる、日本における伝統的音楽療法論が確立した「江戸期」、西洋の音楽療法論が紹介される1891(明治24)年以前の「明治前期」、日本で音楽療法実践が行われるようになった1892(明治25)年以降の「明治後期」の3期に分類し、各々1章を割いて検討を行った。その際、江戸期には儒医の貝原益軒、明治前期には音楽行政官の神津仙三郎、明治後期には精神科医の呉秀三が、それぞれの時代で量・質共に最も影響力ある功績を残していると考えられるため、各章はその人物の著作あるいは実践記録を中心に組み立てた。

江戸期の音楽療法について検討した第1章では、中国古典を基盤とする養生思想の中に音楽が予防医学として用いられていたとの位置づけに至った。また、これらの養生書には、特に貝原益軒の著述に見られるように、江戸期日本の土壌に根付いた音楽を用いつつ、能動的な詠歌舞踏に焦点を当て、詠歌舞踏のもつ心身双方への働きかけが「気血」を養い、それが養生に繋がるといった能動的な音楽活動の効能が強調されていた。なお、同時代のイギリスで展開されていた音楽療法との比較の結果、イギリスでは音楽による身体への影響に重きが置かれていたのに対して、江戸期日本の養生論においては、音楽の「楽」の要素を重視し、音楽が心に働きかける効能を特に重んじるという特徴があるということが明

(別紙様式 2)  
(Separate Form 2)

らかとなった。さらに、江戸末期の養生書の内容分析をもとに、この時期には蘭学の流入に伴って、音楽が内臓器官などの身体面に与える効能へも注目されるようになったことを示した。

第 2 章で検討した明治前期の音楽療法については、開国後に西洋音楽療法論が多量に流入した際、その受容は主に音楽関係者によって行われ、そこでは江戸期の思想的基盤のもとで理解された和漢洋折衷の音楽療法思想が展開されていたことを解明した。また、明治前期の初めは江戸期の影響を受け、能動的音楽療法に関する記述が中心であったが、徐々に音楽聴取による効能を見込む受動的音楽療法に傾倒していく。その際、西洋音楽への言及と共に、神津仙三郎『音楽利害』で見られるように、治療としては患者に馴染みのある音楽が推奨されるなど、音楽の選択に関しては、当時の文化土壌に着目した論が展開されていたことを明らかにした。

第 3 章で検討した明治後期の音楽療法については、受容の担い手が音楽関係者から医学関係者に移っていき、西洋の音楽療法論がそのまま受容されるようになることを示した。その傾向を加速させたのは、西洋の精神医療を直接学んだ呉秀三による東京府巢鴨病院での実践であり、巢鴨病院関連史料及び呉の著作の分析をもとに、そこでは能動的音楽療法と受動的音楽療法の双方が精神医療の一環として行われていたことを実証した。ただし、西洋音楽療法が模倣されるだけでなく、和楽器を用いるほか、浄瑠璃や浪花節の聴取が推奨されるなど、やはり当時の文化土壌や治療対象者の趣味嗜好に合わせた音楽が用いられていたことを論じた。また、明治 40 年代においては実験に即した治療を提唱し、病理学などの臨床研究を重んじるドイツ、フランス、イギリスの医学及び音楽療法思想が主流となり、それまで主要な位置を占めていた実践主義的なアメリカからの影響は減少していく。それに伴い、明治後期の日本音楽療法は生理学的、神経学的メカニズム及び実証的な実験に即した音楽療法例の紹介が増加する。

このように、江戸期・明治期日本音楽療法における伝統的養生論から西洋医学理論への変遷過程を分析したが、身体面に重きを置いていた西洋医学理論を受容しながらも、日本側史料においては、主として精神面への音楽の効能を重んじる様相が一貫して見られ、音楽療法の受容過程において、前近代と近代の身体観は途切れることなく、連続的に発展してきたとの結論に至った。

博士論文の審査結果の要旨  
Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、日本の音楽療法史について、その転換期と考えられる、江戸中～後期から明治期にかけて、主に思想的側面と実践的側面との双方に焦点を当て、その変遷や特徴などの全体像を解明しようとした論文である。そのため、本論文では、音楽史・医学史・思想史や比較文化史などの多様な領域に相渉る学際的な方法論が用いられ、音楽史的にも、医学史的、思想史的にも、非常に高い価値が存している。具体的には、江戸期の養生論などの思想的背景、明治期における西洋音楽や西洋医学の受容の影響などを総合的に見据えながら、関連する夥しい文献史料を博搜して、記述内容の典拠を同定するなど、きわめて実証的な分析や考察を加えている。また、同時代の英国の音楽療法思想との比較などに顕著なように、グローバルな視点も特筆される。加えて、従来の音楽療法史の研究では、前近代（近世）との関係は殆ど考慮されない傾きがあったのに対して、音楽の医学的な利用や思想的側面に限定しながらも、前近代（近世）との連続性を明らかにした点でも、独創性が大いに認められる。

本論文の全体は、序論と結論部分を別にすれば、全3章で構成される。まず、第1章では、江戸期の音楽療法思想の代表例として、儒医として活躍した貝原益軒の著作や思想を分析する。その結果、①彼の音楽思想が、中国古代の儒教思想、就中、その礼楽思想を淵源としつつも、同時に、中国の伝統医学の大きな影響を受けていること、②しかるに、個別的な養生論に関しては、日本の風土や状況に見合った独自の解釈も提出するなど、かなり柔軟な態度も示していること、③音楽の活用が、主として予防医学の側面から評価され、能動的な詠歌舞踏の持つ心身双方への効用が重視されていた点などが、それぞれ明らかにされた上で、折衷・融和的とも言える彼の思想全体の特質に関わる論点についても、正鵠を得た理解や指摘がなされており、大いに評価に値する内容となっている。加えて、貝原益軒との比較・参照の対象として、ほぼ同時代のイギリスにおけるリチャード・ブラウンの音楽療法なども紹介され、機械論的な身体観や心身二元論的な立場にもとづく音楽療法との差異も明らかにされるなど、比較思想的な視点にも、大きな独創性が認められる。次いで、第2章では、明治前期の音楽行政官として、西洋音楽の受容に貢献したものの、現在では、やや忘れられた存在となった感もある、神津仙三郎の伝記的な事実を繙きながら、彼の音楽療法に関する知見が盛り込まれた著作『音楽利害』を分析の俎上に載せる。その過程で、①神津が実際に読み込んだ史料をも同定しながら、彼が洋書のほか、江戸期以来の在来の養生論からも多くの知見を得ており、東洋の伝統的な「気」重視の思想との親和性が高いこと、②一方で、むしろ西洋で主流であった、音楽の聴取による受動的な音楽療法に傾斜しながらも、音楽流体論などの治療原理は受容せず、他方で、患者に親近感のある日本音楽の聴取が推奨されるなど、和漢洋折衷的な音楽療法思想が展開されたことなどが、具体的に論証されている。第3章では、明治後期に至ると、音楽療法の主な担い手が、音楽関係者から、実際にヨーロッパで西洋医学、就中、精神医学を学んだ、呉秀三のような精神医学者による実践へと大きな移行が見られ、西洋の音楽療法理論が、既存の東洋思想の媒介を経ずに直接、受容されるようになったことが、具体的に跡づけられる。呉秀三の巢鴨病院における実践は、当時の医学界での音楽療法のパイオニアとも言うべきものであったが、日本の文化的な土壌をも考慮した、その応用の具体的な事例や実践上の工夫が考察の対象とされる。すなわち、呉自身の留学先のドイツなど、同時代のヨーロッパにお

(別紙様式 3)  
(Separate Form 3)

ける音楽療法の実例に依拠した、作業療法の一環としての音楽演奏などの能動的音楽療法に加えて、いわば受動的な音楽療法としては、患者に馴染みの深い浄瑠璃や浪花節の聴取が推奨されたことなどが、具体的な資料にもとづいて紹介される。更には、巣鴨病院の後継施設である、現在の松沢病院の未公開資料(患者の挙動帳と呼ばれる記録)の分析など、多くの実地による文献調査を踏まえて、往時の音楽療法の実態に迫る手続きや方法論にも、目覚ましいものがある。

以上のように、本論文は、具体的な論証や構成はもとより、文献資料の分析や吟味などの諸点からも、高く評価されるべき内容となっている。なお、若干の疑問点としては、まず、第1章で、同時代の英国の音楽療法思想との差異や対照を際立たせることに急ぐ余り、気を重視して、むしろ身心一元論的とも言える身体観を持つ貝原益軒の音楽効能説の特徴について、心や精神性に主眼を置くものであるかの如く、二項対立的に捉えている傾きも否めない。また、全体としては、貝原益軒の著作を分析や考察の俎上に載せる第1章が、いわば思想史的なアプローチを取るのに対して、明治期以降を対象とする後半の第2章・第3章の方は、むしろ音楽療法の実践に焦点が当てられて、社会史的とも言えるリサーチがなされており、異なる方法論が並立しているような印象も与える。もっとも、この点は、資料上の制約などもあり、かえって著者の幅広い着眼や多分野に亘る力量を証しているとも考えられる。その他、些か望蜀の感もあるが、音楽療法の担い手が、精神医学者へと移行した後であって、音楽関係者がそうした音楽の医学的な活用や効果をどう考えたのかなど、その後の展開に関しても、ある程度の予見的な考察が求められるところである。特に戦後の日本においては、米国の音楽療法が主流化するに至っているが、その所以も含めて、この辺りの状況に関しては、余り注意が払われていないことは、惜しまれる点である。

しかるに、本論文は、そうした瑕疵を勘案してもなお、著者の独創的な観点に加えて、具体的・実証的な分析や検証においても、斯界に一石を投げ得る、十分な価値を有しており、審査委員会は、全員一致で、本論文を博士の学位を授与するに値するものと判定した。